大妻女子大学博物館　特別展

日本文学関係貴重書展示　和歌をつたえる

会期：二〇二三年五月二九日(月)～六月三〇日(金)

解説資料

1　万葉集　二十帖

列帖装
枡形本
江戸時代前～中期写
一六・七×一四・八㎝
大妻女子大学図書館

万葉集は、奈良時代末期（八世紀末）に成立したとされる日本現存最古の歌集。五世紀初頭の伝承歌から天平宝字三（七五九）年までの四千五百十六首が収載され、大伴家持が編纂に関わったとされる。大妻本は、緞子の表紙に美しい装丁が施され、見返しは、金布目地に、紅白梅・桔梗・水仙・朝顔・松などの草木や山川、家などの景物（各冊ごとに絵柄は異なる）を描く。美しく巧みな筆致で書かれた嫁入り本（江戸期に大名や公家の娘などの高貴な女性の嫁入り道具として作成された美麗な調度本）である。

万葉集の写本には、漢字本文と別行に訓を提示する「別提訓」形式と漢字の傍らに訓を付す「傍訓」形式があり、①平仮名別提訓→②片仮名別提訓→③片仮名傍訓という順序で変遷したと推定される。万葉集の嫁入り本には、写本にはない、漢字本文に平仮名傍訓の形式が確認されている。

大妻本は、目録・題詞・左注は平仮名と漢字交じり、歌は平仮名本文の左側に適宜漢字が書かれている。平仮名誕生以前に成立したとされる万葉集の写本・版本・嫁入り本は通常、すべて漢字で記される。平仮名本文で記された大妻本は、極めて特異な書写形式であり、江戸期の万葉集の受容や書写の有り様を考える上で重要なものである。

2　古今和歌集　巻第四　一軸

巻子装
鎌倉時代末期写
三〇・〇×七六五・〇㎝
大妻女子大学図書館

中古前期の最初の勅撰和歌集。二十巻。醍醐天皇の命により撰者紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑が延喜五（九〇五）年四月十八日に撰進（仮名序による）。同年以後追補の歌も若干混在する。中国の類聚体の詩歌撰書名に多く「古今」をつけるのにならい、「古を仰ぎて今を恋ひざらめかも」（仮名序）と文学の永遠性をたたえてその名がつけられた。

大妻本は、伝尊円親王の筆とされる。尊円親王は伏見天皇皇子で第十七世青蓮院門跡。永仁六～延文元年（一二九八～一三五六）。能筆で小野道風・藤原行成の書法を参考に青蓮院流（御家流）を開いた。その筆とされるものでは、『金沢文庫本万葉集切』が有名である。本書は、巻四秋上の一巻を完備しているが、ツレと判断される切としては、国宝手鑑『藻塩草』に巻十三恋三の六行、岩国吉川家蔵『翰墨帖』所収の巻十七雑上九行、藤井隆・田中登著『続々国文学古筆切入門』紹介の巻十九雑体全巻、出光美術館蔵の巻十三恋三断簡六行などの数点が知られ、それらは「能勢切」と呼ばれる名物である。断簡として伝来する他のものに比して、大妻本はひときわ価値が高いものと言える。

3　後撰和歌集　一帖

列帖装
元亨四（一三二四）年写
二一・七×一四・五㎝
大妻女子大学図書館

『古今和歌集』に次ぐ二番目の勅撰和歌集。二十巻。村上天皇の下命により、源順以下の「梨壺の五人」が撰。天暦五（九五一）年成立。大妻本は系統上は藤原定家筆の天福本系に属すると思われ、「天福二年三月二日庚子重以家本終書功（重ねて家の本をもって書功を終ふ）」の元奥書を有し、「元亨四年十月十四日」の書写奥書がある。表紙の織布が珍しい。列帖装ではあるが、料紙は美濃版程度の楮紙を二つ折りにしたものを用いており、折紙列帖装と呼ばれる装丁である。

4　拾遺和歌集　一帖

列帖装
文亀四（一五〇四）年写
二〇・〇×一五・二cm
大妻女子大学図書館

平安時代中期の三番目の勅撰集。二十巻。花山法皇を中心に寛弘初（一〇〇五）年頃成立したとみられる。藤原公任の私撰集『拾遺和歌抄』との関連が深い。四季、賀、別、物名、雑、神楽歌、恋、雑四季、雑恋、哀傷に部立され、千三百五十一首の歌を収める。万葉集や紀貫之、大中臣能宣、清原元輔の歌などが多い三代集の一つ。

5　後拾遺和歌集　二帖

列帖装
室町時代中期写
二三・五×一六・二cm
大妻女子大学図書館

平安時代末期の四番目の勅撰集。二十巻。承保二（一〇七五）年、白河天皇の下命により、藤原通俊撰、応徳三（一〇八六）年成立した。大妻本は室町時代中期の写本と見られるが、詳細は調査中。

6　拾遺和歌集　後撰和歌集　二帖

列帖装
横本
江戸時代初期写
一一・〇×一五・〇cm
大妻女子大学図書館

同様の様式で写された『拾遺和歌集』と『後撰和歌集』。他の勅撰集も同様に写されていたか。

7　金葉和歌集　一帖

列帖装
室町時代中期写
二五・〇×一六・八cm
大妻女子大学図書館

平安時代後期成立の五番目の勅撰和歌集。十巻。白河上皇の命により、源俊頼の撰。二度の改修を経て大治二（一一二七）年成立。三次にわたる各撰集を初度本、二度本、三奏本と区別し、二度本がもっとも流布した。大妻本は正親町公澄書写と伝わり、『新編国歌大観』所収の二度本精撰本系の二条為明筆本より、十首余歌数を多く有し、今治市河野信一記念文化館所蔵伝藤原為家筆本が、歌序・歌数ともに最も近いと推測できる。伝承書写者の公澄は永亨二（一四三〇）年生、文明二（一四七〇）年没で、権大納言従二位に至った公卿。書写の形体等より、ほぼその頃の写本と推測される。

8　金葉和歌集　一帖

列帖装
室町時代中期写
二五・二×一五・八cm
大妻女子大学図書館

本の大きさが少し異なるものの、装丁と筆致が、5『後拾遺和歌集』と極めて類似する。

9　詞花和歌集　一帖

列帖装
室町時代中期写
一九・二×一四・二cm
大妻女子大学図書館

平安時代後期成立の六番目の勅撰集。十巻。崇徳院の下命により、藤原顕輔撰、仁平元（一一五一）年成立。古写本の多くには「詞華和歌集」とある。書名は、北村季吟の『八代集抄』に「詞花集の名目は英詞の花麗なるを集められし心なるべし」と記すように、すぐれた表現の歌の意であろう。大妻本は、後小松院（一三七七～一四三三）宸筆に、飛鳥井雅教（一五一九～一五九四）が書き継いだとされる。『大妻文庫2』に影印・翻刻がある。

10　千載和歌集　二帖

列帖装
室町時代写
二五・四×一八・〇cm
大妻女子大学図書館

平安時代後期成立の七番目の勅撰集。二十

巻。後白河院の下命により、藤原俊成撰、文治三（一一八七）年成立。大妻本は、本文末尾及び極札により二条為重男守能筆写に拠ると見られる。為重（一三二五～一三八五）は二条家直系最後の歌道師範。守能の名は『尊卑分脈』にも見えないが、「彰考館本冷泉系図」に載る（井上宗雄『中世歌壇史の研究　南北朝期』参照）。本文系統は松野陽一氏の分類で古写善本が多いとされる「乙類」に属すと見られる。

11　千載和歌集　一帖

列帖装
江戸時代前期写
二〇・八×一四・八cm
大妻女子大学図書館

若松の表紙の模様が愛らしい。本文系統については未調査。

12　新古今和歌集　二帖

列帖装
室町時代中期写
一九・八×一五・七cm
大妻女子大学図書館

鎌倉時代成立の八番目の勅撰和歌集。後鳥羽院の下命により、藤原定家・藤原家隆以下六名が撰者となり、元久二（一二〇五）年、一応の完成を見たが、その後も改訂・切継が続けられた。現存伝本の多くは切継時代の第二類本に分類されるが、大妻本もその本文系統に属する。巻末の識語には定家の孫冷泉為相（一二六三～一三二八）の名があり、国立民俗博物館蔵本（岩波新古典大系『新古今和歌集』の底本）にも、少異はあるが為相の識語があり、系統的に近い。

13　ドナルド・ハイド旧蔵　後撰和歌集　拾遺和歌集　後拾遺和歌集　千載和歌集

列帖装
桝形本
永正十一～十五年（一五一四～一八）写
一二・〇×一一・七cm
大妻女子大学図書館

永正年間に、覚阿なる人物が書写した勅撰集が、四点、本学図書館に所蔵されている。それぞれ個別に本学の蔵書となったものだが、いずれも箪笥に収められていたと思しき小箱に入れられ、それぞれの本に、反町茂雄（古書店「弘文荘」店主）の蔵書印「月明荘」、及びアメリカの蔵書家ドナルド、メアリ・ハイド夫妻のコレクションであったことを証す「拝土蔵書」の印がある。もとは八代集であったと思われる。『千載和歌集』の旧蔵者、藤井隆氏の識語によると、覚阿は時宗の僧であるという。反町茂雄『日本の古典籍』には、「一人の手で書かれた集としては、最も古いものの一つである」と記されている。

『後撰和歌集』　二帖
「于時不省老眼頽齢七十六覚阿書之（時に老眼を省みず頽齢七十六覚阿これを書く）」と永正十一（一五一四）年五月六日の「覚阿」の奥書がある。

『拾遺和歌集』　二帖
永正十二年閏正月、覚阿七十七歳の折の書写と記されている。

『後拾遺和歌集』　二帖
奥書はないが、書写は同じく覚阿と見られる。

『千載和歌集』　一帖
上冊のみ。奥書の確認はできないが、書写は同じく覚阿と見られる。
藤井文庫旧蔵　付：断簡　一葉（下巻切）

14　二十一代集　四十二帖

列帖装
江戸時代中期写
二三・三×一七・二cm
箪笥　幅二一・八×奥行二八・五×
高さ（八代集）　三〇・五cm
（十三代集）四七・一cm
大妻女子大学図書館

江戸時代中期に制作された嫁入り本。二十一代集が『古今和歌集』から『新古今和歌集』までと、『新勅撰和歌集』から『新続古今和歌集』までとに分けて、それぞれ箪笥に収められている。二十一代にわたる勅撰集を、八代集と十三代集とで分割する明確な意識がうかがえる。勅撰集二十一代中、『古今』『新古今』『続古今』『風雅』『新続古今』の五つは「真名序」を持つが、大妻本にはすべての「真名序」がない。嫁入り本であることと関連があろうか。各帖は列帖装。菊牡丹唐草の緞子張り。金色下絵付題簽。見返しは、金四菱繋ぎ地。一筆ではないが、似た筆致で統一している。

『古今』二帖、『後撰』二帖、『拾遺』二帖、
『後拾遺』二帖、『金葉』一帖、『詞花』一帖、
『千載』二帖、『新古今』四帖
（以上八代集）

『新勅撰』二帖、『続後撰』二帖、
『続古今』二帖、『続拾遺』二帖、
『新後撰』二帖、『玉葉』二帖、『続千載』二帖、
『続後拾遺』二帖、『風雅』二帖、
『新千載』二帖、『新拾遺』二帖、
『新後拾遺』二帖、『新続古今』二帖
（以上十三代集）

箪笥は蠟色塗りに「五七の桐」と「十六弁菊」の紋、「平四ツ目」「九重菊」紋がちりばめられている。

15　赤染衛門集　二冊

袋綴装
江戸時代初期写
二三・七×一六・七cm
大妻女子大学図書館

赤染衛門の家集。第四首に『百人一首』で有名な「やすらはでねなましものを」という若き日の歌から、曾孫の大江匡房の誕生を祝う最晩年の歌まで六百余首が、赤染自身によってほぼ年代順に配列された流布本系と、四季・離別などの七部立を持ち、四百余首よりなる異本系に分けられ、前者は、所載歌によってさらにA・Bに分けられる。大妻本は、伝存数が少ない流布本系のAに属し、貴重な一本と言える。赤染衛門は平安時代中期の歌人。大江匡衡と結婚したが、夫婦仲の良さは有名で、『紫式部日記』でも、紫式部は清少納言や和泉式部には辛辣だが、赤染衛門には好意的である。『栄華物語』正編の作者ともされる。

16　建礼門院右京大夫集　一帖

列帖装
江戸時代前期写
二三・四×一七・九cm
大妻女子大学草稿・テキスト研究所

平安時代末期、建礼門院徳子（平清盛女・高倉天皇中宮）に仕えた右京大夫の家集。平家一門の栄耀、源平争乱、平家滅亡という時代的悲劇を背景に、作者の平資盛との恋愛を軸として、乱世を生きた女性の心情を詠む。家集としては詞書が長く、女房日記的性格も有する。歌数三百五十余首。大妻本は江戸時代前期の写本。永享十二（一四四〇）年藤原利永写本を写したもの。外題は「建礼門院」。

17　女房三十六人歌合　一帖

列帖装
江戸時代中期写
一六・八×一七・一cm
大妻女子大学図書館

『女房三十六人歌合』は、平安時代前期の小野小町から鎌倉期の藻璧門院少将に至る女

性歌人三十六人を左右に番えた、鎌倉時代の歌仙歌合である。文永九（一二七二）年以降、弘安元（一二七八）年以前の撰かと推定されている。撰者は不明であるが、鎌倉時代中期の歌人藤原基家（一二〇三～一二八〇）の可能性が指摘されている。後世には絵を伴って歌仙絵としても享受され、21『女房三十六歌仙かるた』もその一例である。

伝本は多く、広本は歌人一人につき各三首を結番するが、大妻本は略本（一人一首本）であり、一類本（一人三首本）の一首目を抄出した五類本に当たる。筆者の桑原長義は、江戸時代中期の霊元院歌壇で活躍した堂上歌人である。

18　和漢朗詠集　二軸

巻子装
鎌倉時代末～南北朝時代写
上　三〇・〇×一五五・〇cm
下　三〇・〇×一六六・〇cm
大妻女子大学図書館

本書を納めた塗桐箱に、尊円筆との紙片が貼付されており、尊円親王の筆跡として伝来してきたことがうかがえる。尊円親王については、2『古今和歌集』を参照。金罫がひかれ、朱墨による訓点の書き入れが見られる。罫線の腐食により、欄外の一部と本文行が一行欠落している。また、下巻の末尾十行は、後代（江戸時代初期か）の補写と思われる。

19　和漢朗詠集　一冊（上下合冊）

袋綴装
江戸時代初期写
二一・二×一四・七cm
大妻女子大学図書館

『和漢朗詠集』は、平安時代中期の詩歌集で、詩歌に一定の節をつけて歌う朗詠に適した漢詩文の秀句と和歌計八百余首を、長和二（一〇一三）年頃に藤原公任（九六六～一〇四一）が撰んで編纂したものである。すぐれた詩歌のアンソロジーとして早くから広く流布し、平安中期から近代に至るまで、『古今集』『伊勢物語』『源氏物語』などと並んで日本を代表する古典としての地位にあった。

本書は、江戸時代初期の書写と推定され、本来上・下二巻であったものが一冊に合冊されている。保存状態は必ずしも良好とはいえず、補修の跡も認められるが、それゆえに書誌学的には興味深い資料である。

20　百人一首　一帖

列帖装
江戸時代中期写
一七・〇×一八・〇cm
大妻女子大学図書館

百人の歌人の和歌一首ずつを選び集めた秀歌集。中でも、藤原定家が宇都宮頼綱（法名蓮生）の願いを受けて京都小倉山の山荘で選んだとされるものが有名であり、百人一首と言えばこの小倉百人一首を指すようになった。その成立の詳細については、九十七首が『百人一首』に一致しつつも、**九九**後鳥羽院・**一〇〇**順徳院を含まず他に三首を収めて百一首からなる『百人秀歌』の成立にも絡んで諸説がある。

本書は、伝冷泉為綱筆、江戸時代中期写。萌葱色菊紋に割小菱繋の緞子表紙に色変わりの料紙を用いた美装本。内題は「小倉山荘色紙和歌百人一首」。本文は定家様で書かれている。冷泉為綱（一六六四～一七二二）は、上冷泉家の公卿・歌人。従二位権中納言。

21　百人一首かるた　一組

江戸時代中～後期頃写
二百枚（百枚×二）
八・〇×五・五cm
大妻女子大学図書館

大妻図書館蔵『百人一首かるた』は黒漆桐箱入りで、畳紙はくすんだ茜もしくは橙色の地に菊牡丹唐草文様。料紙は金泥を施す。読み札の作者表記は、**七二**祐子内親王家紀伊のみが左に位置、他はすべて右。**四三**中納言敦忠・**六六**前大僧正行尊・**九八**正三位家隆の官位は『百人秀歌』に一致する。**七三**中納言匡房のみ『百人一首』（権中納言匡房）とも、『百人秀歌』（前中納言匡房）とも異なる。本文典拠は混態本文によるものだろう。天皇・上皇は繧繝

縁の畳上に坐すことが通例、類例もあるが本かるたでは、**七二**祐子内親王家紀伊と**八九**式子内親王にも用いられている。江戸時代中後期の作か。

22　女房三十六歌仙かるた　一組

江戸時代中期写
七十二枚（三十六枚×二）
八・五×五・八cm
大妻女子大学図書館

17『女房三十六人歌合』をかるたにしたものである。読札の本文は、略本（一人一首本）のうち、広本の一類本（一人三首本）からの抄出である四類本と一致する。

江戸時代中頃の製作と判断され、読札の金銀泥彩色を施した歌仙絵は繊細にして殊に美麗であり、和歌の書体も取札を含めて品格ある書様と評し箔散らし、裏の金箔押しなども豪華で全体として見れば保存も良好である。丸に梅鉢紋入黒漆塗箱入。

23　自讃歌かるた　一組

江戸時代中期写
三百四十枚（百七十枚×二）
八・〇×五・五cm
大妻女子大学図書館

『自讃歌』は、鎌倉時代の私撰集で、後鳥羽院・藤原定家・西行ら、新古今時代を代表する十七名の歌人の歌を各十首ずつ、計百七十首収める秀歌撰である。後鳥羽院撰とする序の記述は後世の仮託とみられるが、古くは自撰の秀歌撰とみなされ、室町時代から江戸時代にかけては多数の注釈書も著されて広く流布した。

本品は『自讃歌』をかるたにしたものであり、取札の絵を囲む枠の部分にかなりの剝落が見られるなど、実際に遊戯に使用されていた痕跡がある。一方、絵の褪色はさほど見られず、絵も筆跡も瀟洒で風情があり、『小倉百人一首』以前に流行していた歌かるたの一例として興味ある優品といえる。

資料解説：大妻女子大学文学部日本文学科
君嶋亜紀准教授
倉住薫教授
小井土守敏教授
桜井宏徳教授